

名城大学 経済・経営学会会報

No.50

『名城論叢』
第十三巻 第二号 付録
二〇一二年九月二八日
名城大学 経済・経営学会 発行

ロンドン、カーディフ訪問記
……東田 明 1
ゼミ指導と金融教育
……柳田純也 8
『戦争の詩／詩の戦争
—スペイン継承戦争をめぐる—』
……西山 徹 17

ロンドン、カーディフ訪問記

経営学部 東田 明

ロンドン

七月上旬、ロンドンとカーディフを訪れた。皆さんはロンドンあるいはイギリスについてどのようなイメージをお持ちだろうか。私にとっては今回が初めてのイギリス訪問であったが、渡航前のイメージは、曇天と不味い食事、物価高程度のものであった。そして、多くの人々が抱いていると思われるこのイメージは、裏切られなかった。

まず天候だが、滞在中、スカッと晴れるという晴天は、ロンドンでは体験できなかった。天気予報を見るとよくわかるのだが、イギリス上空を細切れの雲が絶えず横切っていた。したがって、雲がかかれは雨が降るのだが、その雨雲が小さいため、短時間で止むことが多い。しかし、訪れたタイミングが悪かつ

たのか、雨が止んでも、青空が見られることはほとんどなかった。私の場合、ロンドンとカーディフで一週間程度の短い滞在であったが、それでも晴天が続かないと、気分が沈みがちになる。曇っていれば気温も上がらず、日中でも二〇度に届かない日が何日もあった。長袖のシャツと上に何かを羽織ってちょうどいいような気候であり、過ごしやすいとは言えるだろう。

しかし、ロンドンオリンピックの中継を見れば分かるように、七、八月のロンドンは比較的、晴天の日が多いようである。それでもスカッと晴れていない様子も、多くの方が目にしたことだろう。

食事については、いいレストランに行けば、美味しいものが食べられるが、そうでなければまったく期待できない。ただ、パブという文化は非常に魅力的であった。通常、カウンター内にビールのサーバーが五から一〇くらい置いてあり、注文時にお金を払い、ビールを受け取る。店内は、食事きた人、一人で本を読みながらビールを飲む人、観光客など様々な人たちが思い思いに過ごしていた。繁盛店では、ビール片手に立って話したり、本を読む人の姿が店の外にまで見られた。

ロンドンで私が最も驚いたのが、自転車の多さである。特に通勤時間帯は、自転車と並んで走る姿がよく見られた。



タワーブリッジと五輪

服装はスーツの人、ジーンズとパーカーの人など様々である。ロンドンでは、自転車は車道を走らないといけないと法律で決まっているようで、車道を自動車と並んで走っていた。当然のことながら自転車には方向指示器が無いので、曲がる際には腕を水平に伸ばし、後続の車がわかるようにしていた。また、自転車専用道路も多く設けられていた。街中、いたるところにレンタル自転車が置いてあり、それに乗って走る人の姿もよく見られた（七頁写真）。

どんな種類の自転車が多いのか。ロードバイクやマウンテンバイクを多く見かけたが、目についたのが、小径車が多く走っていたことであった。小径車とは多くの場合、タイヤが二〇インチに満たない自転車と理解してもらえばいいだろう。日本ではアメリカやドイツのメーカーが人気であるが、ロンドンではイギリスのメーカーであるブロンプトンをよく見かけた（四頁）。名古屋でブロンプトンを目にすることは一か月に一回程度であるが、ロンドンでは一日に五〇から一〇〇台程度を見かけたと思う（数えたわけではないが）。ロンドンの街中を、大きな体のイギリス人がヘルメットをかぶって小さなブロンプトンに乗る姿は様になっていた。一つ残念だったのは、いずれの自転車も汚かったことであるが、雨が多いロンドンでは仕方が無いのかもしれない。むしろ、それだけ生活の道具として活用されていると考えるべきか。

自転車の多さと並んで驚いたことが、昼休みにジョギングをする人の多さである。ロンドンでは一時からランチャイムのようにであるが、この時間になると、どこから現れるのか、ジョ



地下鉄のオリンピック広告

ギングウェアに身を包んだ多くのビジネスパーソンらしき人々が、個人、もしくは二、三人程度の固まりでジョギングしている姿を多く目にした。特に、テムズ川に架かるロンドンブリッジやその東に位置するタワーブリッジ周辺は、ロンドンの金融街であるシティにつながっていること、またこの辺りは近年再開発が進み整備されていることもあり、観光客にとつての観光スポット、地元の人々の憩いの場というだけでなく、ジョギングするビジネスパーソンにとつては絶好のジョギングコースのようである。

日本も近年、マラソン大会が多く開催され、空前のマラソン、ジョギングブームである。しかし、平日の昼休みに走る人の姿を目にする機会は多くはない。見かけたとしても、それは見るからに走ることを競技として取り組んでいる人の姿であり、一般のビジネスマンが走っている姿はあまり目に見えないだろう（皇居周辺では走っているかもしれないが）。イギリス人と日本人のジョギングブームの違いはどこにあるのだろうか。

今年ロンドンを訪れた者として、最後にオリンピックについて触れておきたい。テレビによく映し出されているように、街中いたるところにオリンピックのロゴや各国の国旗が飾ってあった。テムズ川に架かるタワーブリッジの五輪は日本のテレビでもよく映し出されている（二頁写真）。また、地下鉄のエスカレーター横の壁一面にはオリンピックのスポンサーであるコカ・コーラの真っ赤で巨大なポスターが貼られていた。ホテルにもオリンピックの観戦のために訪れた旅行者を歓迎するポスターやステッカーなどがあつた。



ブロンプトンで通勤

しかし、こうしたオリンピックのための準備が、時として観光客に不幸をもたらすことがある。マラソンのスタートとゴール地点になっているザ・マルは、バッキンガム宮殿とトラファルガー広場を結ぶ道（広場）であり、ウィリアム王子とケイト・ミドルトンさんの結婚式のパレードでも通った道である。私がここを訪れた時はオリンピックの旗を道路脇の柱に取り付けている最中であり、通り抜けができなかった。これが非常に残念であった。

カーデイフ

ロンドンを後にし、バディントン駅から電車でカーデイフに向かう。長距離鉄道の子ケットは駅の券売機やインターネットでも買えるようだが、機械の操作が複雑だとか、現地の住所が必要とのことだったので駅の窓口で購入した。往復で購入すると割引がある点は日本と同じである。また、朝と夜の混雑が予想される時間以外であれば、さらに割引率が高いようである。座席の指定も可能。駅では、電車が出発するというアナウンスは無く、多くの人は電車の運行状況を表す電光掲示板を確認し、乗車準備ができたことを確認して、乗り込んでいた。座席の予約がある席の背もたれには、reservedと書かれたカードがあり、予約済みであることを表していた。しかし、そのマークが無い座席には自由に座って良いようである。つまり、日本の特急のように、指定席と自由席が車輛で区別されているわけではないのである。ただし、電車によっては予約済みの札が無い場



シティーホール（カーディフ）

合もある。その場合、チケット購入時の座席指定の意味はどうなるのだろうか。ちなみに、カーディフからロンドンへの帰路の電車では、往路と同様、座席指定をしたものの、座席には予約済みの札がかかっておらず（他の座席でも札は見られなかった）、私の予約した席にすでに座っていた若い男性たちに、席を替わってもらうことになった。

カーディフはロンドンから西へ特急で約二時間、ウェールズの首都である。ちなみに、イギリスの温泉地として有名なバースにはカーディフから電車で約一時間である。この原稿を読む皆さんには、オリンピックで日本女子サッカーチームが南アフリカ、そしてブラジルと戦って勝利した場所として記憶されていることであろう。現地で暮らしている人の話によると、日本女子サッカーの試合のチケット（南アフリカ戦）は、容易に手に入ったようである。イギリス女子サッカーチームは決勝トーナメントに進んだが、イギリスでは女子サッカーの人気は、男子サッカーのナショナルチームやプレミアリーグの盛り上がりから比べれば、注目度は非常に低いそうである。またウェールズに日本女子サッカーに関心のある人がどれだけのかを考えれば、当然と言えば当然である。ただし、カーディフで開催される恐らく唯一のオリンピック競技であるので、雰囲気は味わいたいとスタジアムを訪れた人も多かったはずである。

女子サッカーの試合が行われたミレニアム・スタジアムは、七万人以上を収容できる、ラグビー用のスタジアムである。ウェールズはラグビーの人气が高く、この巨大なスタジアムがウェールズセントラルステーションから遠くない場所にある。

セントラルステーションから南に約一〇分歩けば、海に出る。この海に近いカーディフ南部の一部は新しい住宅地になっており、新しいアパートが立ち並ぶ。アパートの前の歩道は広く、また所々に、錨のようなモニュメントがあり、ドッグとしての名残を残している。また最南端のベイエリアには多くのレストランやイベントスペースがあり、若者や家族連れで賑わっていた。カーディフの夜は、九時を過ぎてもまだ明るいいため、レストランを出て、不思議な感じを覚えた。

食事では、ラム肉がウエールズを代表する料理の一つらしく、学会のカンファレンスディナーにも出てくるほどであった。海が近いので、魚もよく食されるようである。ロンドンではアフタヌーンティーにスコーンが定番であるが、カーディフでは、スコーンを平らにしたウエリツシケキが市場などで売られていた。一つ食べてみたが、素朴な味であった。朝食や小腹が空いたときに食べるにはいいかもしれない。

ロンドンもカーディフもそうだが、スーパーでは、温めるだけですぐに食べられるようないわゆるレディーミールが多くなっていた。共働きの家庭が多いことが一因のようである。

駅の北側には、大きなショッピングエリアがある。複数のショッピングモール、百貨店、スーパーマーケット、市場、レストラン、パブなどが集結しており、一つの街を形成している。

この商業地域の北部にカーディフの観光名所であるカーディフ城や博物館、学会会場であるカーディフシティーホールなどがある。この辺りの建物の多くは石造りで、ヨーロッパの古い町並みを想起させる。ちなみに、学会を主催したカーディフビ

ジネスクールは、さらに北に位置する。

学会の会場であったシティーホール（五頁）は一九〇〇年代前半に建設されたものであり、イングリッシュ・ルネッサンスという様式の建物である（cardiff.gov.ukより）。部屋には大きな絵画、シャンデリア風の照明、高い天井と古い洋館を思わせるたたずまいであった。天井が高いと優雅な雰囲気ではあるが、声が聞き取りにくいという欠点がある。ただでさえ、英語を聞き取るのに苦労するのだが、それがさらに困難になる。このような面で、こうしたホールが会議室として適しているとは言えないと思うのだが、古い建物を可能な限り再利用しようとする姿勢が見て取れる。先程述べたアパートも古い倉庫の骨組みを活用したものであったし、街全体で古い建築物を有効活用しようとする姿が見られる。

国際学会

さて、最後に私が参加した学会について触れておきたい。これは、Interdisciplinary Perspectives on Accounting (IPA) と「国際学会」 Asian Pacific Interdisciplinary Research on Accounting, Critical Perspectives on Accounting (SIPAS) 学会とローテーションで、三年に一回開催される。通常、会計に関する学会は、財務会計と管理会計に分かれ、さらに細分化されたテーマの学会が設立されている。つまり会計に関する研究テーマの対象ごとに学会が設立される。しかし、IPAを含むこれら三つの学会では、財務会計の研究も管理会計の研究も

含まれる。さらに言えば、環境会計も自治体の会計も、病院の会計も含まれるのである。では、何が学会参加者に共通なのかと言えば、それは会計を、それを取り巻くコンテクストや、組織や社会との関係の中で捉えようというパースペクティブであろう。

私が見た報告の中では、アクターネットワーク理論、制度派組織論、ミツシエル・フーコーの理論を応用したものが比較的多かったように思う。

日本の学会と比べたとき、このIPAや他の海外の学会ではコミュニティの形成や維持、または強化に重点が置かれているように思える。今回のIPAでは、学会開催の前日、初日、そして最終日にパーティーが開催された。最初の二つはドリンクだけのことが多いが、最後のディナーは前菜からメイン、デザートとフルコースである。昼食も、日本の学会であれば、大学内外に三三五食事を取りに行くことが多いが、海外の学会では昼食が準備され、皆が集まって食事をとる。これもコミュニティの維持に一役かっつていそうである。ちなみに、学会期間中に三度昼食の機会があったが、形式は立食で、味はいずれもイマイチであった。

いかがでしたでしょうか。研究者という仕事をしていれば、イギリスに行く機会はそのなりにあると思われるため、ここでの記述は多くの人々にとっては目新しいものではないかもしれない。しかし、二〇一二年七月時点のロンドンとウエールズの空気を多少なりとも感じ取って頂ければ幸いである。



整然と並ぶロンドンのレンタル自転車